ホルスの槍《号外》（立ち読み版）

◆　エジプトの魔術的神話空間　◆

《アブ・シンブル大神殿》

目　次

TITLE	AUTHOR	PAGE
巻頭言	編集長	1
西洋魔術とエジプト神話	V.H.Fr.R.F.	2
ｱﾝｸ･ﾌ･ﾅ･ｺﾝｽｰの銘碑	Hocuspocus	9
小五芒星儀式小考	ＴＲＫ	１１
小五芒星儀式小考に寄せて	G.H.Fr.M.E.S.A.	１９
ヒエログリフで遊ぼう	Hocuspocus	２２
カルデア神託	G.H.Fr.M.E.S.A.	２４
国内魔術団体事情	編集部	３８
BOOK REVIEW	編集部	３９
春分儀式レポート	編集部	３９
編集部からのご連絡	編集部	４０

ＶＯＬ　１０－１　◇　春・夏の号　◇　２００１年7月１５日
Ｉ∴Ｏ∴Ｓ∴　Ｒａ－Ｈｏｏｒ－Ｋｈｕｉｔ　Ｔｅｍｐｌｅ　Ｎｏ．２　発行

カルデア神託

M.E.S.A.

カルデアの貨幣の裏面は、テウルギアと魔術の世界である。

ジョン・ダフィー　『ビザンティンの魔術』

はじめに

西洋魔術を研究する者なら、誰でも一度は『カルデア神託』または、『ゾロアスターのカルデア神託』という書名を目にしたことがあるだろう。

黄金の夜明け団の歴史を調べると、かのウィン・ウェストコット博士が団の正規カリキュラム外の参考図書として編纂した『ヘルメス選書』（Corectanea Hermetica）の第６巻に、自ら編纂した『ゾロアスターのカルデア神託』を収録した。この書物は１９８３年にアクエリアン出版（現在は、米国の会社に吸収）から単独で出版されたほか、『ヘルメス選書』全冊合本としてホルムズ社から復刻されているので、今でも入手可能である。

また、ネオ・プラトニズムの歴史を学んだ者は、プロティノス、ポルピュリオス、プロクロスなどの著作のそこかしこに引用されており、いかなる体系だろうかと疑問に感じた人もいるだろう。

しかし、ゾロアスター（ザラスシュトラ）関連の文献を漁っても失望するばかりである。ペルシアとの関連を求めようと『アヴェスタ』などのゾロアスター教（または、ズルワーン教、ミトラ教）文献を探っても、『カルデア神託』なる言葉は出てこない。何故なら、これはヘレニズム文化において、ギリシャ・ローマ文化圏で再構成されたペルシアのマゴスの教えだからだ。

なお、本稿中の『カルデア神託』引用文に付した番号（例：W-145/M-163)は、ウェストコット編集の『ゾロアスターのカルデア神託』及びルス・マジェリック『カルデア神託、ギリシャ語本文、翻訳及び注釈』における断章番号を意味する。書籍によって断章番号が異なるので、ウエストコット版をW、マジェリック版をMで表現した。不明のものについては不明と表現してある。その際、一部の訳文は、『黄金の夜明け魔術全書』上巻　江口之隆訳より引用させて頂いた。ここに明記しつつ、感謝する。

１　カルデア神託の勃興

ローマ人にとりゾロアスターとは、プラトンの６千年前（トロイア戦争の５千年前という説もある。）に生まれたマゴス神官を従える神人である。プラトンの６千年前というのは、恣意的な表現であり、プラトンこそゾロアスターの智慧の継承者であると主張したいのだ。プリニウスによれば、これを最初に主張したのはプラトンの弟子のひとりクニドスのエウクドソスだとされる（『プリニウスの博物誌』雄山閣出版　１９８６年　ＸＸＸ巻１の３参照）。また、アリストテレスもプラトンの先駆者のひとりとしてアジアのマゴスをあげている（『アリストテレス全集１２』講談社学術文庫　１９９１年　所載『形而上学』XⅣ巻４の1901B）。また、６千年というおおざっぱな年代も空想的な数字であり、今日の研究ではゾロアスター（ザラスシュトラ）は、紀元前１０世紀～７世紀頃にイラン地方で教えを説いたと推測されている。

そもそもゾロアスターという名前を文献に残した西欧の哲学者はプラトンである。かれの著作に１箇所だけ記述がある。

「ペルシア王の優位は、はるかに大であって、…
（王子の）年が十四になると、王室のパイダゴーゴス（子供掛り）と呼ばれるものの手に引き取られて、…
この人たちはペルシア人のうちから選抜された青年男子で、最優秀と判定された四人である。…
そのうち知恵の第一人者は、ホロマゼスの子ゾロアステルの秘儀を教える。
これは神々の礼拝祭式をいうのであるが、またさらに王道についても教える。」

（田中美知太郎訳『アルキビアデス』Ｉの１２１、岩波書店　１９７５年）

ホロマゼスのゾロアステルとは、アフラ・マズダーのゾロアスターのギリシャ語読みである。つまり、プラトンは何らかの形でペルシアのマゴスの教え、それもゾロアスターの教義を伝授されていたのである。しかし、プラトンはその教義のどこからどこまでがマゴスの教えかを明確に示さなかった。

次に争点が明確化するのは、２世紀後半にカルデア人ユリアノス父子の著した『カルデア神託』（Oracula Chaldaica, Ａｏｙｉａ　Ｘａｌｄａｉｋａ）の出現であった。ユリアノスがトランス状態に入り、神託を受けて書いたのが本書であると伝えられている。また、子ユリアノスは降神術（Theurgia, Θｅｏｕｒｙｉａ）（以下「テウルギア」という。）を行う者であった。残念ながらこの原著は失伝しているが、さまざまな形で断片が集成されて用いられた。

ユリアノス父子が何者であるかについては、判明していない。かれらに冠される＜カルデア人＞という呼称も、人種や国籍を示すものではなく＜東方の智慧の体現者＞を意味するヘレニズム時代の呼び名であり、かれらが熟達した魔術師であることを示していた。これはポルピュリオスが『De regressu animae in Vie de Porphyre』において、「カルデアの儀式において尊重すべき人物」と語っていることで裏書きされる。『カバラ・デヌダータ』においてもカルデアの秘術という表現が用いられている。

さて、ここでは研究者の慣例に従って、かれらをユリアノス父子（Juliani）、父親を父ユリアノス（Julian Pater）、息子を子ユリアノス（Julian Fils）と呼ぶことにする。

１０世紀末の古辞書『スーダ』によれば、父ユリアノスは、＜魔術の熟達者＞（Ｘａｌｄａｉｏｚ）であると同時に＜思弁家＞（ψｉｌｏｓｏψｏｚ）であった。（Suda No.433）従って、かれは実践家であり、決してカルデアの哲学者であった訳ではない。息子に至っては＜降神術師＞（Theurgoi, θｅｏｕｒｇｏｚ）という通名が示すとおり、神霊が降下して入り込む霊媒の役割も果たしていた。もともと、このテウルギア、テウルゴイという用語自体が、ユリアノス父子の造語であると伝えられている。

テウルギアを同じような響きをもつ単語＜神学＞（Theologia, Θｅｏｌｏｇｉａ）と混同してはいけない。ハンス・ルウイによれば、テウルギアとテオロギアは、同じ目標＜神との合一＞を目指す２種類の道だという。（『カルデア神託と降神術』アウグスティヌエン社　１９７８年　パリ）

その差違は何か、グレゴリー・ショウの説明によれば、次のように図式化できる。（『降神術と霊魂』ペンシルヴァニア州立大学出版　１９９５年　ペンシルヴァニア）

テウルギア＝セオン＋エルゴン（神の働き）

テオロギア＝セオン＋ロゴス（神の語り）

さて、２世紀に戻ると、父ユリアノスは４巻の書物『ｔｅｓｉ　ｄａｉｍｏｎｏｎ』を著し、子ユリアノスは『カルデア神託』のほかに『θｅｏｕｒｇｉｘａ』と『ｔｅｌｅｓｔｉｘａ』という書物を執筆したと伝えられている。また、プロクロスは子ユリアノスが天の領域に関する一連の作品の著者であると言及している（『ティマイオス注釈』Ⅲ, 27, 10）。これらは現存しない。

この時代にアレクサンドリア図書館においてゾロアスター文献がギリシャ語訳されて収納されており、当時の傑出した国際都市であると同時に学問都市であったアレクサンドリアにおいては、カルデアの知識というものは夢物語ではなかった。

さて、ヘレニズム時代という曖昧な区分は、おおむねプラトンの時代から初まる。このヘレニズム時代において、東方の神々の台頭に伴いギリシャのオリュンポスの神々が魅力を失い、権威の座から失墜するとともに、自然の神格化が行われた。ヘレニズム時代の著作家にとり、天体（日月星辰）は神であった。月下界においては、四大元素（ｓｔｏｉｘｅｉｏｎ　elementia）も神聖であった。例えば、七惑星のうち水星は＜ヘルメスの星＞（Ｅｒｍｏｕ　ａｓｔｅｒ）であり、これを誘導するのはヘルメスの霊である。天体が神であることは、プラトンも述べていた（『ティマイオス』３４、『法律論』８９８）が、アリストテレスは、かの明晰な口調で、「天球のあるだけ、これを動かす神もまたいます。」と語っている。

惑星崇拝は占星術の思想と結びつき、やはり神聖とされた元素（ストイケア）は、同時にギリシャ語の字母、特に七母音（ａｅｈｉｏｕｏ）を指すが、個々の母音は対応する惑星の神秘なる符号として、惑星に影響力を及ぼすと信じられた。パリ魔術パピルス文書５７４号『ミトラ祈祷書』は、礼拝者を繰り返し＜七つ

の不死のコスモクラトォーレス＞、つまり＜七母音＞に直面させる。占星術への傾倒は、ミトラ信徒だけの現象ではない。ヘレニズム時代の占星術とは、占いの類ではなく宇宙論に根ざした哲学であった。オルフェウス教徒は、葬儀において、死者を代弁して次のように語る。

「われは地と星辰の天の子なり。・・・・われもまた神となれり。」

これら占星術的思想を背景として、新プラトン主義者たちの『カルデア神託』への対応を望むと、興味深い状況が見えてくる。

新プラトン主義の始動は、３世紀後半のローマにおけるプロティノス（AD205-270）の学派が皓歯とされるが、プロティノス自身はこの『カルデア神託』には直接言及していない。テウルギアが哲学者に与えた影響については、間接的な表現をもって述べているだけである。

「つまり、魔術師たちの諸技術の場合にも・・・共感によって生じる力を利用しているのである。」
（『エネアデス』Ⅳ,４,26　『プロティノス全集』　第３巻　１７８ページ　水地宋明訳
１９８７年　中央公論社）

そして、賢者の肉体や物質的環境に対する魔術の一定の効力を認めつつ、賢者の霊魂そのものに対する魔術の影響を否定する。（前掲『エネアデス』Ⅳ－４－４３）

ただし、注意すべきは、かれの使用した用語は、魔術（μαγεια　マゲイアー）や、妖術（γοητεια　ゴエティアー）であり、テウルギアではなかった。当時、マゴイやゴエティケーと呼ばれる存在は、一部の魔術パピルスに見られるように、本来の教えからは離れて、退化した霊的知識の残滓を切り売りする呪術師に堕した者が多かったのである。かれらは商売として霊的な知識を弄んでいた。

ユリアノス父子は、この風潮を打破し、旧態然とした魔術や妖術と決別すべく、テウルギアという新語を創造したのだ。その後、多くの哲学者たちは、このテウルギアなる新概念に魅せられた。魔術や妖術に手を染めるのは気が進まないが、神聖なる作業は行いたい。霊智を獲得したいと思うのが、プラトン以来の哲学の伝統に忠実な者たちの願いであった。かれらにとって、聖なる技であるテウルギアは手垢の付かない学問であった。

技術面だけを見るならば、テウルギアと、マゲイアーやゴエティアーとの差違は決定的なものではない。問題点は精神面にあったのだ。フランツ・キュモンによるテウルギアに対する定義がそれを端的に言い表している。

「畏敬に値する形態の魔術、光明化された種類の妖術」
（キュモン　『ペルペトゥアの光』　ギュースナー社　パリ　１９４９年　３６２ｐ）

テウルギアへの直接的言及が始まるのは、プロティノスの弟子ポルピュリオス（AD233頃-305頃）からである。かれはテウルギアには、霊魂の非理性的部分を浄化する機能があると捕らえていた。逆に言えば、それ以外の効能を認めず、『カルデア神託』を聖なる書物として高く評価することはなかった。

ポルピュリオスと鋭く対立しながら『カルデア神託』を擁護したのは、イアンブリコス（AD250頃-330頃）である。イアンブリコスは、ポルピュリオスからの公開質問状『ポルピュリオスからアネボーへの手紙』に対して、『アバモンの回答』を著わした。これらは、『エジプト、カルデア、アッシリアの秘儀について』（略称『エジプトの秘儀について』本稿における引用は、トマス・テイラーの英語訳を使用）として広く流布することになる。

また、現存していないが『カルデア神託』について二十八巻の注釈を書いたと言われる（注１）。その結果、『カルデア神託』は新プラトン主義者たちの聖書として扱われるようになる。

イアンブリコスは、自らを＜ピュタゴラス派＞と称して、ポルピュリオスとは別の視点からテウルギアを追求した。ポルピュリオスの思想（プロティノスの思想とほぼ等価である。）と決定的に異なるのは＜降下せざる霊魂＞と＜降下せる霊魂＞の問題である。

プロティノスは、霊魂は三分割され、その上位部分は星辰の彼方にある三者（ヌース）の領域から離れることはなく、霊魂の下位部分だけが地上の活動に関与するのだと結論づけた。それ故にプロティノスにおける忘我の神的恍惚体験とは自らの霊魂の内側を覗き込み、その＜降下せざる霊魂＞がヌースと融合した部分

に焦点を合わせることで生まれる体験である。プロティノスの霊魂は、神霊の本然たるヌースから切り離されてはいないのだ。

「他方われわれの魂については、次のように考えるべきである。すなわち、それらの一部分（一能力）は常にかの世界にとどまり、また一部分はこの世界に関係している。そして残りの一部分は、前二者の中間に位置する。……魂全体を引きずりおろすことは、許されていないからである。」（前掲書『エネアデス』Ⅱ,９）

このプロティノスの神人一体感は、弟子ポルピュリオスが「五年間に四回恍惚の境にあって神と融合した。」（『プロティノスの一生と彼の著作の順序について』２３　＜世界の名著　１５＞　中央公論社　１９８０年）と証言したほどの個人的な＜神への距離の近さ＞に立脚している。プロティノスは、卓抜した哲学者であるが、同時に非常に強力な霊媒でもあったのだ。弟子のポルピュリオスも、この恍惚の領域に入ったと告白しており（前掲書）、師匠の主張する＜降下せざる霊魂＞の「地上から天界までを結ぶ連続性」に疑義を挟まなかった。プロティノスの教えは、半神たる古代の＜英雄＞に近い精神的強靱さと霊的感受性を有した＜精神の巨人たち＞の方法論であった。しかも、プロティノスにとっては、神を知った人間は神になる。「われわれの関心は過ちを犯さないことにあるのではなく、神となることにあるのである。」（前掲書『エネアデス』Ⅰ,２,６）

しかし、大多数の凡庸なる人間にとっては、＜神への距離＞は絶望的なまでに遠い。かれらにとって、自分の霊魂の神に至る連続性を感じよ、まして、神になれと言われても、理不尽で無責任な嘲弄にしか思えないだろう。かれらが神的体験（ヌミノース）を得るためには、それなりの舞台設定が必要だった。それは古代においては、秘儀体験のための入信儀礼であったり、デルフォイの神託や、アスクレピウスの治癒の夢である。これらは舞台も整っており、霊験あらたかな神話的背景に恵まれた伝統の儀礼であり、物質的な思考に埋没していた俗人でも、この特別な瞬間に、特定の神聖な場所においては、神を間近に感じることができたのだ。だが、何の助力もなく、自力で心の奥底に神々の世界を覗くのは、凡夫には理解を絶した行為である。

イアンブリコスは、その実際的な思索により、一般的な人間の弱さと、隠された可能性を理解していた。故に、より実践的な主張を行った。かれにとって、霊魂とは神霊的源泉から「降下」し、完全に「分離」した存在である。しかも、霊魂全体が降下し、受肉し、肉体を有した存在に移行すると主張した。この前提に立てば、霊魂はヌースからは、全く切り離されていることになる。かれがテウルギアを重視したのは、肉体を纏っている間は、＜降下せる霊魂＞が自力では、ヌースに帰還できないからだ。

それでは、この神的源泉からの分離はどのように行われるのか。

イアンブリコス、そして、プロクロスは、＜容器＞に注目した。人間の霊魂を運ぶ容器、つまり「霊魂の容器」（ｏχημα　πνευμα）である。

そして、霊魂を語る場合に常に引き合いに出されるプラトンは次のように語っている。

「すなわち、初代の出生（γενεσιζ　πρωτη）は、すべての魂に対して、ただ一種のもののみが指定されるであろうが、それはいかなる魂も神によって不利な扱いを受けることのないためである。そして、魂はそれぞれにとってしかるべき、各々の時間表示の機関（惑星）へと蒔かれ（ｏπｏρａν）、生けるもののうちでも敬神の念最も篤きもの（人間）に生まれなければならない。」
（『ティマイオス』４１ｅ　種山恭子訳　『プラトン全集　１２』１９７５年　岩波書店）

ここでは、種子（霊魂）を蒔くという概念が導入されている。

イアンブリコスは、霊魂の容器がアィテールそのものであり、粗雑な物質ではないと主張した。それを構成するのは、天体そのものでさえなく、神それ自身から引き出される。従って、「蒔くとは、霊魂を容器に蒔くのではなく、霊魂を（容器とともに）目に見える神々に蒔くのである。」（プロクロス『ティマイオス注解』第３巻のイアンブリコス引用文より。）と主張している。

霊魂の容器も精妙なる存在であり、それを次のように包み込むものだと結論している。

霊　魂　　・・・神霊の分光
↓
霊魂の容器　　・・・星素（アィテール）
↓
肉　体　　・・・元素

しかし、何よりもイアンブリコス自身が一個のテウルゴイであった。

かれが学堂を開堂して以来、多数の弟子が師匠の側を離れなかったが、ときどき友人らと離れて一人で修法を行った。弟子はそれに関して疑心暗鬼となり、「おひとりになって何をなさっているのですか・・・神々に祈りを捧げている最中に、地面から４メートルばかりも浮き上がり、お体と衣服が黄金の妙なる色に変じ、祈りをやめると、地面に降りて私どもと交わって下さるとのこと。」と糾問する。

イアンブリコスは笑って弟子の追求をかわしていたが、とある温泉地でそれに答えてやる。地元民に温泉の名前を聞くと、湯に触れ、短い呪文を唱えると、温泉から童子を呼出し、抱擁した上で温泉に帰した。これを見た弟子たちは、以後、懐疑の念を捨て去ったと言う。（参照：『ピュタゴラス伝』訳者解説　２０００年　国文舎）

上記のイアンブリコスとほぼ同様の観点からテウルギアに接したのは、プロクロス（AD412-485）である。プロクロスは、ビザンティンで生まれ、落陽のアテナイのアカデメイアで学んだ。シュリアノスに師事し、小秘儀としてアリストテレスの全著作を学び、大秘儀としてプラトンを学んだ。その後、アカデメイアに残り学頭となる。

かれの学頭としての生活は、夜明け前に目覚め、日出時の日拝を行い、早朝から講義と著述、正午の日拝を行い、午後は懇談と講義、日没時の日拝を行い、夜は魂を浄化する修法を行う。かれもテウルゴイであった。講演のさなかにプロクロスの頭部を光が包んでいるのを見て礼拝した聴講者がいると言う。

プロクロスは５年の歳月をかけて『カルデア神託注解』を執筆した。

2　カルデア神託の思想

それでは、『カルデア神託』の思想とは何か？

この思想が敷衍されてから哲学者は二つの道を通じて神に至ることとなる。

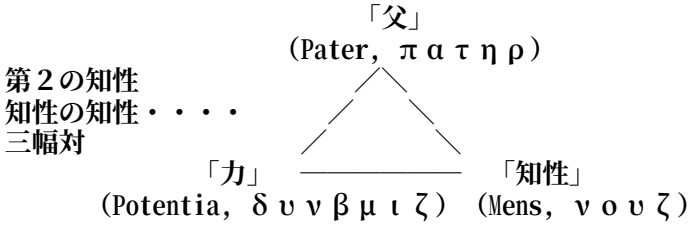
ひとつは旧来の神学（Theologia）であり、知を通して神に至る。もうひとつが、テウルギアであり、神との合一により、神に至る。

a　流出する知性

プラトンの『パルメニデス』において、一者の思想が語られた。

この『カルデア神託』においては、すべての根源は「父」（Pater, πατηρ）である。そして、この「父」は「父的な単子」（Unum Paterum, πατρικη μοναζ）という原初の「一者」としての形態と同時に「父」、「力」、「知性」の「三幅対」（Triad, τριαζ）に流出する緊張を孕んだ存在である。

第１の知性・・・・・・「父的な単子」
（Unum Paterum, πατρικη μοναζ）



ウェストコット博士は、ユダヤ教カバラとの類縁性を説き、第一の知性を「父的深淵」（πατρικ

I∴O∴S∴

I∴O∴S∴ is the institute of magic which started activity in Japan in 1986.

VOL 10－1 ◇ 春・夏の号 ◇ 2001年7月15日
I∴O∴S∴ Ra－Hoor－Khuit Temple No. 2 発行

All rights reserved. Copyright (C) 2001 by I∴O∴S∴